

# 英米文化学会会報

第 88 号

平成 23 年 7 月 15 日



暑い季節になると、ハワイのビーチを思い出す。つい、ライフセーバーがいるところの近くで海に入ってしまうという私自身の生来の臆病はともかく、人命救助のために日頃から鍛練を怠らない、その緊張した様子は、水遊びそっちのけで見入ってしまうほど、魅力的である。(撮影：佐野 2008 年 2 月)

## 目次

- ◆ 大会担当より 英米文化学会第 29 回大会 (9 月開催) のお知らせ
- ◆ 抄録の書き方 当学会での発表・投稿予定の会員必読
- ◆ 学術担当より 学会誌『英米文化』第 42 号論文募集
- ◆ 分科会担当より 分科会「イギリス近代演劇と劇場  
——19 世紀末～20 世紀初頭」メンバー募集について
- ◆ 財務担当より 平成 22 年度収支会計報告・平成 23 年度予算
- ◆ 例会担当より 英米文化学会第 136 回例会 (11 月開催) のお知らせ
- ◆ 事務局より 評議員の選出・理事の改選・会報の電子化・会員消息

◆ 英米文化学会第 29 回大会 (9 月開催) のお知らせ  
(大会担当理事: 松谷明美)

日時: 平成 23 年 9 月 10 日 (土) 10:30～

場所: 大東文化大学・大東文化会館 K-0101 ホール<地図は 5 ページに掲載>  
(東武東上線・東武練馬駅下車徒歩 5 分)

当日会費: 一般 500 円 学生 300 円

受付開始 10:00  
開会の辞 <10:30 - 10:40> 英米文化学会会長 小野昌 (城西大学)

研究発表第1部 <10:40 - 12:00>

1. 米国グラフィック・ノヴェルにおける女性自伝文学の潮流  
中垣恒太郎 (大東文化大学)  
司会 内田均 (横浜美術大学)
2. 書物史の要素から考察する *The History of St. Paul's Cathedral in London* (1658)の同時代的意義  
高野美千代 (山梨県立大学)  
司会 小林弘 (東京理科大学)

研究発表第2部 <13:30 - 16:20>

3. War Hysteria—軍事面からみた日系人強制収容—  
中畑義明 (国立久留米工業高等専門学校)  
司会 永田喜文 (明星大学)
4. Queequeg's Essential Role in the Final Design of *Moby-Dick*  
『白鯨』の最終的な構想におけるクイーケグの重要な役割  
Steve Redford (静岡大学)  
司会 佐野潤一郎 (創価大学)

休憩 14:50 - 15:00

5. 『籠の中の鳥』に込められたピューリタンへの挑戦  
石原万里 (国立福島工業高等専門学校)  
司会 木原文子 (関東学院大学)
6. サイクル劇としての《隅田川》  
—「カーリユー・リヴァー」から読み直す—  
式町眞紀子 (法政大学)  
司会 越智敏之 (千葉工業大学)

閉会の辞 <16:20 - > 英米文化学会理事長 佐藤治夫 (日本大学)

懇親会 <17:00 - 19:00>

懇親会場：イオン板橋ショッピングセンター (東武練馬駅北口前)  
5階・「ビュッフェ 菜の香」  
会費：2000円

大東文化会館から懇親会会場までは、徒歩3分です。

<発表抄録>

1. 米国グラフィック・ノヴェルにおける女性自伝文学の潮流

中垣恒太郎 (大東文化大学)  
司会 内田均 (横浜美術大学)

従来のアメリカン・コミックスと比較して文学性の高い「グラフィック・ノヴェル」と称されるジャンルが今日まで発展を続けており、とりわけ近年では、女性、ヒスパニック系やアジア系の書き手による作品に対する注目も増してきている。また、Modern Language Association 学会においてコミックス・グラフィック・ナラティブ部会が発足したことに示されているように、学問分野としてのコミック研究領域が飛躍的に発展を遂げつつある。本発表ではこうした動向を踏まえつつ、近年の米国グラフィック・ノヴェルにおける、主に女性コミック・アーティストによる自伝・回想録の潮流に注目し、女性自伝文学の方法論と、グラフィック・ノヴェルの手法について、比較メディア論の観点から再吟味する。具体的には、Alison Bechdel, *Fun Home: A Family Tragicomic* (2006)、Laurie Sandell, *The Impostor's Daughter: A True Memoir* (2009) を素材に、コミックというメディアの特質、女性の書き手による家族観、記憶・自伝の方法論の分析を試みる。

2. 書物史の要素から考察する

*The History of St. Paul's Cathedral in London* (1658) の同時代的意義

高野美千代 (山梨県立大学)  
司会 小林弘 (東京理科大学)

17世紀英国の好古学者ウィリアム・ダグデール (William Dugdale) による *The History of St. Paul's Cathedral in London* (1658) は、ロンドンの大火で焼失した聖ポール寺院の旧聖堂の姿を現在に伝える。彫刻師ホラー (Wenceslaus Hollar) が制作した40点以上の図版が挿入されたこの書物は、旧聖堂の外観と内部構造の詳細を明らかにするもので、建築史的観点からも貴重な文献と言える。本研究発表では、建築史的価値の考察にとどまらず、この書物の同時代的意義という部分に注目する。著者ダグデールがあえて共和政時代にこの書物を出版した意図を探りながら、書物史的観点からサブスクリプションによる図版の挿入とその効果という点に特に言及して、*The History of St. Paul's Cathedral* の意義を論ずる。

3. War Hysteria—軍事面からみた日系人強制収容—

中畑義明 (国立久留米工業高等専門学校)  
司会 永田喜文 (明星大学)

日本軍による真珠湾攻撃直後、アメリカ政府は在米枢軸国市民を同一基準で扱う予定であったが、やがて日本人及び日系人のみを審問もなく内陸部へ強制収容した。米国議会による調査委員会の報告書 *Personal Justice Denied* (1983) に基づき、1988年大統領名で収容された日系人に正式に謝罪と補償が行われた。報告書は強制収容の理由として、(1)「人種偏見」(racial prejudice)、(2)「戦時下の異常な心理状態」(war hysteria)、(3)「政治指導性の欠如」(failure of political leadership)の三点を挙げている。従来日米両国における研究は戦時における強制収容にも拘らず軍事面が蔑ろにされ、(1)「人種偏見」と(3)「政治指導性の欠如」に集中する傾向があった。本発表では軍事面を中心に強制収容に至る経緯を日米両国で発行された新聞を中心に分析する。

#### 4. Queequeg's Essential Role in the Final Design of *Moby-Dick*

『白鯨』の最終的な構想におけるクイーケグの重要な役割

Steve Redford (静岡大学)

司会 佐野潤一郎 (創価大学)

Many of the early investigations of the composition of *Moby-Dick* focus on how Melville began to re-think his project sometime during the summer of 1850—and on how Ahab and his epic battle with Moby Dick were added after that summer, and on how an increased Shakespearean influence gave power to that confrontation. These major and repeatedly cited changes are often viewed as the keys to the greatness of *Moby-Dick*. However, more recent investigations have suggested that Queequeg (at least as we know him in the final version of the novel) was also a late addition.

In this presentation, then, I focus on Queequeg, arguing that Melville intended him not merely as a player with a negligible role, but rather, a character essential to his final design. The presentation includes a textual analysis of the novel, as well as an examination of the scholarship related to Melville's process of composition that informs a significant part of that analysis. It attempts to show how Melville “paired” Queequeg with Ahab in some ways, and “paired” him with the white whale itself in others, in order to create what I choose to call “a symphonic condemnation” of Ahab and his quest.

#### 5. 『籠の中の鳥』に込められたピューリタンへの挑戦

石原万里 (国立福島工業高等専門学校)

司会 木原文子 (関東学院大学)

ジェイムズ・シャーリーは、喜劇『籠の中の鳥』(*The Bird in a Cage*, 1633) で、ピューリタンに挑戦している。出版に際し、シャーリーは、ピューリタンのパンフレット作家ウィリアム・プリンへの献辞を添えたのである。17世紀前半ピューリタンは芝居を墮落の源として攻撃していたが、中でもプリンは、女性が舞台上上がることを糾弾し、それが仮面劇に参加した王妃ヘンリエッタ・マライアへの誹謗中傷とみなされ、投獄され、「籠の中の鳥」の状態にあった。

作品において、女性達が塔に閉じ込められていたり、その塔に鳥籠が送られてきたり、「籠の中の鳥」という言葉には、何重にも意味がかけられている。女性達が劇中劇として、ダナエとジュピターの物語を演じるシーンもあり、シャーリーは王妃マライアを擁護しているようにも見える。『籠の中の鳥』というタイトルに込められた意味と、ピューリタンに対抗するシャーリーの姿勢を考察する。

#### 6. サイクル劇としての《隅田川》—「カーリュウ・リヴァー」から読み直す

式町眞紀子 (法政大学)

司会 越智敏之 (千葉工業大学)

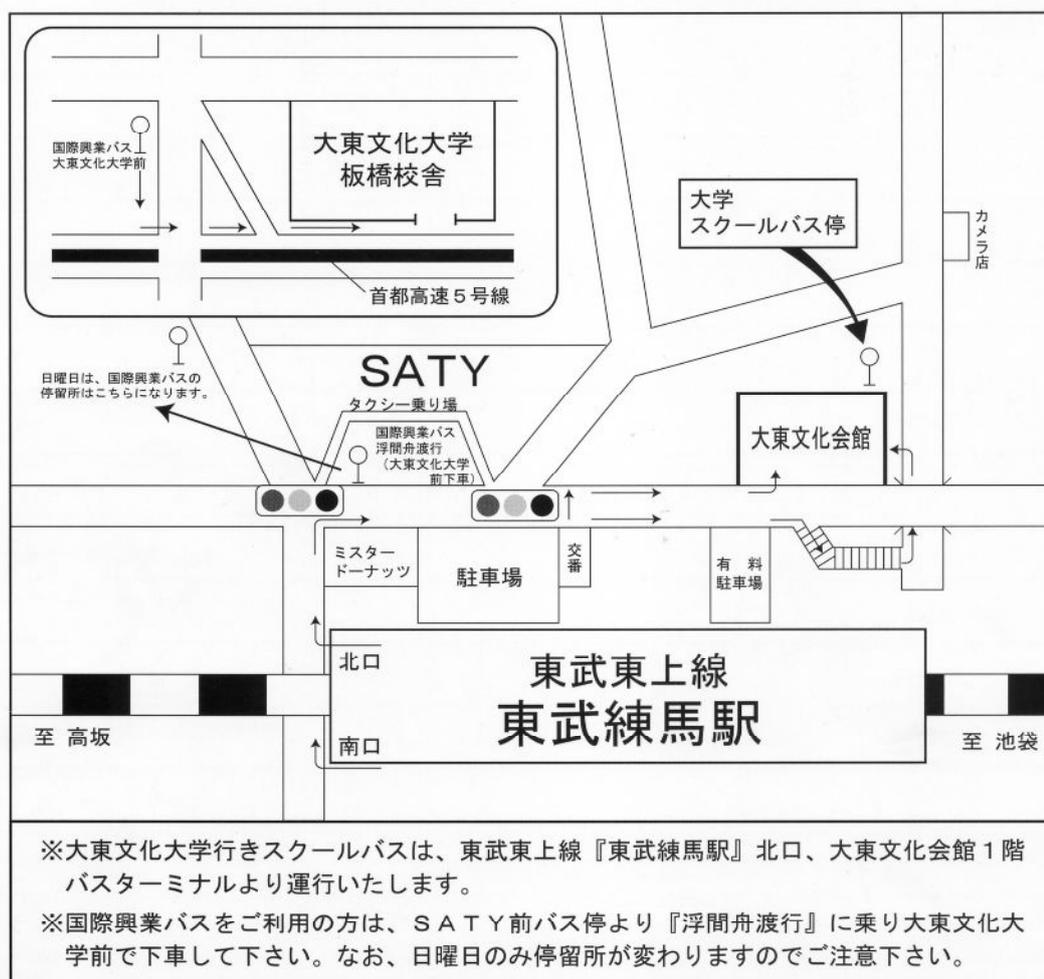
「カーリュウ・リヴァー」は、能《隅田川》に感銘を受け、二度も観たベンジャミン・ブリテン (Benjamin Britten) によって作曲されたオペラである。後に台本を担当するウィリアム・プルーマー (William Plomer) の強い薦めに従い、1956年の来日時に能を鑑賞したブリテンは、

8年を経た初演の際、「我々の寓話には特別日本的なるものは残されていない」と断言しているように、「日本的であること」には固執しなかった。《隅田川》は、人買いにさらわれた息子を尋ね求めた母親が、異郷で果てた子の墓前で、その幻影と空しく再会する話である。一方「カーリュー・リヴァー」では、息子はやはり非業の死を遂げたものの、姿形を伴って母親や会衆の前に現れ、復活の喜びを説く。男性のみで進行し、舞台の規模も抑制された能の形態が「カーリュー・リヴァー」創作への動機と目されている。では、《隅田川》以外の能にベンジャミン・ブリテンの興味が広がらなかったのはなぜか。宗教改革期に衰滅した自国の中世演劇を、現代に甦らせようと取組んでいたブリテンが、おりしも鑑賞した《隅田川》に何を見出し動かされたのか。これらの点について、彼の作品史と合わせて考察する。

9月10日10:30から開催の大会会場は東武練馬駅から徒歩5分の大東文化会館です。

懇親会は17:00からイオン（旧・SATY）5階「ビュッフェ菜の香」（SATYはイオンに名称変更）

## 大東文化会館周辺図



大東文化会館は、駅前すぐです。バスに乗る必要はございません。

## ◆抄録の書き方

## 当学会での発表・投稿予定の会員必読

### 1) 抄録の目的

英米文化学会では、例会での研究発表の抄録を学術研究上重要なものと位置づけており、研究発表そのものの評価を左右するものと考えている。抄録は、研究発表内容が容易に理解できるように作成する。また発表の場に不幸にして出席できなかった、他の研究者にも研究発表の内容(論理展開と結論)について、容易に類推できるような書き方を採用しなければならない。また、発表時の発表資料の先頭部分には、最終的に受け付けられた、抄録を掲載するものとする。

抄録は発表者が行った研究の内容を表すものであるから、前書き、引用、統計処理への直接の言及、図表の提示などは避け、研究の直接の目的、方法、考察、結論が容易に理解できる文体を採るものとする。特に結論部分に「したい」とか「試みる」のような、実際に発表で行ったかどうか、後で抄録を読む他の研究者が判断できないような書き方は避ける。結論部分は、「論じる」「考察する」「紹介する」「評価する」などの実際に発表の場での発言内容を示す言葉で結ぶ。

### 2) 抄録の書式

抄録は、以下の書式の条件を満たしているものとする。

#### イ：タイトル

a) 和文タイトル タイトルに書籍名がはいる場合は、特殊な場合を除き出版年などの書誌データを入れない。

b) 英文タイトル

ロ：氏名 共同研究成果の発表では、実際の発表者を筆頭にする。代表者の口頭発表で、ここに記入されている全員に、口頭発表のクレジットが付与されるので、筆頭者のみが口頭発表すればよいものとする。発表者が発表途中で、ここに記入された研究者と交代することは許容される。

ハ：所属 発表者が複数に渡る場合は、全員の所属を提出するものとする。

ニ：抄録の本文 本文の字数は、和文抄録の場合は全角文字 350 字以上 400 字以内とし、英文抄録の場合は 200 語以内とする。

### 3) 抄録の用語

イ：直接の研究対象に関する、日本国外の人名・地名は、初出時に括弧つきで原語表記を付けるものとする。

ロ：専門用語を外国語で直接表記する場合は、カタカナを付ける。またその専門用語に日本語訳があれば必ず付ける。抄録では専門用語についての解説・説明は行わない。

### 4) 提出

抄録の提出には、上記事項をもれなく記載して、担当理事宛てに、電子メールの本文に添付して送信する。

### 5) 書直しの要求

担当理事は、抄録の書体統一ならびに上記の観点から、発表申込みに当り抄録の書直しを要求することがある。

◆ 学術担当より 学会誌『英米文化』第42号論文募集  
(学術担当理事：君塚淳一)

当学会の学会誌『英米文化』第42号の原稿締め切りは10月末日です。

投稿原稿は、担当の君塚淳一（〒311-4151 水戸市姫子 1-785-18）までお送りください。

## 学会誌『英米文化』投稿規程

### <投稿規程>

1. 本誌は、英米文化学会の機関誌であり、原則として一年に一回発行する。
2. 投稿原稿は、英語文化における文学、文化、語学、英語教育などの論文とし、未発表のものに限る。ただし、学会で口頭発表したものについてはその限りではない。その旨を明記した注を、表紙1頁に入れること
3. 投稿資格 本学会員とし、投稿する当該年度までの会費を完納している者に限る。
4. 応募締め切り 毎年10月末日までに、原稿3部と、記録媒体に入れたファイルならびに略歴(所属学校・機関、研究分野、主要研究テーマ)を学術担当までに送付すること。
5. 原稿掲載の可否 学術委員会による査読を経て決定する。
6. 編集、校正は、編集・学術委員会にて行なう。執筆者校正は二校までとする。初校は一週以内、再校は3日以内に返送すること。期限を過ぎても返送されない場合に、学術委員会は掲載を断る権利を有する。
7. 上記以外の案件については、理事会の判断が優先される。

### <執筆要項>

1. 長さ・形式 和文論文は12,000から16,000字数の間にまとめる。A4用紙に38字×25行、フォント12で打ち出す。英文論文も5,000から7,000語数を目安とし、A4用紙に75字×25行とする。
2. 和文論文には、英文表題をつけること。応募論文は、論文の筆署名、所属名(非常勤の場合は(非)、大学院生の場合は(院)と付記)、論文題名、口頭発表に関する注記、謝辞などは表紙にのみ記載し、論文第一ページ以降は題名と本文のみとする。なお、日本名のローマ字標記は原則として姓名の順にする。例 山田太郎 YAMADA Taro
3. 英文・和文の論文は共に、200語程度の英文のAbstractをつける。英文論文については、専門職によるネイティブ・チェックを受けた後に投稿すること。
4. 本文への注釈
  - a) 注は本文の記述順にアラビア数字を附し、後注とする。
  - b) 外国の人名、書名などは、初出の箇所で日本語の後にマル括弧付で、綴りを併記する。書式の細部に関しては、『MLA新英語論文の手引き』(北星堂)の最新版に遵うものとする。
5. 提出する原稿には、CD、DVD、フロッピーなどの記録媒体いずれかを添付する。
6. 執筆者負担金は『英米文化』出版後、財務委員会で負担額を算定し、執筆者に通知する。執筆者には、掲載誌5部と抜き刷り50部を進呈する。負担金は一頁につき2000円である。

以上

## ◆ 分科会担当より

(分科会担当理事：須田理恵)

### 分科会「イギリス近代演劇と劇場——19世紀末～20世紀初頭」 メンバー募集について

発起人 藤岡阿由未 門野泉 蒔田裕美

本分科会が企図するのは、上演の観点から見たイギリス近代、特に19世紀末から20世紀初頭の演劇の共同研究およびその研究成果の発表です。この時期に焦点を当てる理由は、戯曲上演のみならず多様なエンターテインメントを生んだこの時期の豊かな演劇文化の開花にあります。当時のイギリスの劇界は、ヴィクトリア朝の伝統を維持する一方で、ヨーロッパ大陸のまったく新しい演劇思潮を移入し始めていました。まさに交錯する伝統と革新こそが、この時期の演劇の豊潤さを生み出したと言えるでしょう。

本分科会では、この時期の演劇研究を「劇場」をキーワードとして進めていく方針です。ロンドンの劇場は、たとえば劇場名を冠する「サヴォイ・オペラ」というジャンルを生み出すほど、それぞれの劇場が特定のジャンル創造の拠点として存立していました。創造の拠点としての劇場は、言うまでもなく上演が行われる空間です。したがって、研究対象には上演台本、興行主、演出家、俳優、美術、照明など作り手の要素をまず含めます。しかし「劇場」はまた、その時代の人々が観客として集う空間でもあるため、舞台面のありようのみならず、当然ながら観客の受容も研究の射程域に入れることになるでしょう。以上のような「劇場」という空間的なアプローチによって、当時のイギリス演劇の実践のみならず、人々の生活と緊密な関係にあった演劇文化の全体像までもを焙り出すことができると期待もあります。

エドワード朝時代の演劇創造の拠点となったいくつかの劇場（ライシウム劇場、ヒズ・マジェスティーズ劇場、コヴェント・ガーデン劇場、サヴォイ劇場、セント・ジェームズ劇場、ロイヤル・コート劇場、ロンドン・コロシウム、エンパイア、アルハンブラ等）を取り上げて、メンバーがそれぞれの研究発表を予定しています。本分科会の趣旨に賛同し、また参加を希望される学会員の方は藤岡阿由未 Theatre(at)ses-online.jp まで、ご一報いただきたいと思っております。

#### <おことわり>

メールアドレスの表記については、@入りのメールアドレスを検索・流用して迷惑メールを送りつける悪質な業者が、昨今、多いようですので、「@」を「(at)」に置き換えて表記させていただいております。メール作成のときには、お手数とは存じますが(at)を@に置き換えてご送信いただきたくお願いいたします。

## ◆平成 22 年度収支会計報告・平成 23 年度予算

(財務担当理事：山根正弘)

6月11日、例会のあと臨時総会にて、平成22年度収支会計報告と平成23年度予算（案）が承認されましたので、以下に会計報告・予算を掲載いたします。なお、会計監査は6月1日、山下信一・河村博旨両先生により行なわれました。今年度分の年会費納入がまだお済みでない方は、この機会にお願いします。納入状況は、山根正弘 MasahiroYamane(at)SES-online.jp に問合せ下さい。

年会費 : 5,000円

口座番号 : 00160-7-611777

加入者名 : 英米文化学会

平成 22 年度英米文化学会収支会計報告

平成 23 年 6 月 11 日

財務担当 山根正弘

自 平成 22 年 4 月 01 日

至 平成 23 年 3 月 31 日 単位:円

収入		支出	
摘要	金額	摘要	金額
前年度繰越金	1,575,469	事務局費	208,648
年会費	1,105,000	学術委員会運営費	1,079,660
学会誌(40号)掲載料	484,000	広報費	102,665
印税	368,889	大会運営費	172,886
雑収入	9,471	例会運営費	126,856
		理事会運営費	39,089
		翻訳プロジェクト費	5,000
		IT担当費	29,685
		出版担当費	9,759
		分科会運営費	120,234
		サーバー賃借料	113,400
		年会費払込手数料	12,620
		予備費	65,958
		次年度繰越金	1,456,369
合計	3,542,829	合計	3,542,829

上記会計報告について、厳正な監査の結果、適正であると認めます。

平成 23 年 6 月 1 日

会計監査 山下 信一

河村 博旨

平成 23 年度英米文化学会予算

平成 23 年 6 月 11 日

財務担当 山根正弘

自 平成 23 年 4 月 01 日

至 平成 24 年 3 月 31 日

単位:円

収入		支出	
摘要	金額	摘要	金額
前年度繰越金	1,456,369	事務局費	250,000
年会費	1,000,000	学術委員会運営費	600,000
学会誌(41号)掲載料	146,000	広報費	120,000
印税	300,000	大会運営費	150,000
雑収入	10,000	例会運営費	150,000
		理事会運営費	80,000
		翻訳プロジェクト費	100,000
		IT担当費	50,000
		出版担当費	20,000
		分科会運営費	100,000
		出版助成費	1,000,000
		サーバー賃借料	113,400
		年会費払込手数料	13,000
		予備費	165,969
合計	2,912,369	合計	2,912,369

◆英米文化学会第136回例会（11月開催）のお知らせ  
（例会担当理事：田嶋倫雄）

次回の例会は以下の日程と場所を予定しています。

日時：平成23年11月12日(土)

場所：日本大学歯学部

（JR 御茶ノ水、営団千代田線新御茶ノ水、都営新宿線小川町 他 下車）

\* 例会会場（日本大学歯学部）



◆事務局より 評議員の選出・理事の改選・会報の電子化・会員消息  
（事務局担当理事：大東俊一）

\*評議員の選出

「英米文化学会評議員会規約」に基づき、理事会により以下の会員が評議員に選出されました。なお、任期は平成23年4月から平成25年3月までです。

留任：佐野榮三郎、伊東田恵、門野泉、倉崎祥子、相良英明、佐久田英子

新任：上野和子、越智敏之、川口淑子、北林光、吉原令子（敬称略）

## \*理事の改選

理事の改選に伴い、上野和子学術担当理事が退任され、前年度まで出版担当理事であった君塚淳一氏が学術担当理事に就任されました。また、出版担当理事には今年度より内田均氏が就任されました。なお、任期は平成25年度3月までです。各理事の職掌は以下の通りです。

会長 常任理事 小野昌  
理事長 常任理事 佐藤治夫  
副会長 常任理事 曾村充利

- ・各種問合せ（転居、勤務先などの会員情報の変更も含む）  
事務局長 常任理事 大東俊一 (ShunichiDaito(at)SES-online.jp)
- ・『英米文化』への投稿  
学術担当理事 君塚淳一 (JunichiKimizuka(at)SES-online.jp)
- ・学会による学術出版、出版物に関する問合せ  
出版担当理事 内田均 (HitoshiUchida(at)SES-online.jp)
- ・分科会の設立、状況に関する問合せ  
分科会担当理事 須田理恵 (RieSuda(at)SES-online.jp)
- ・大会での研究発表申込み  
大会担当理事 松谷明美 AkemiMatsuya(at)SES-online.jp)
- ・例会での研究発表申込み  
例会担当理事 田嶋倫雄 MichioTajima(at)SES-online.jp)
- ・学会報等への投稿、例会・大会関係資料に関する問合せ  
広報担当理事 佐野潤一郎 (JunichiroSano(at)SES-online.jp)
- ・年会費、投稿料について  
財務担当理事 山根正弘 (MasahiroYamane(at)SES-online.jp)

## \*会報の電子化

これまで印刷した会報を皆様のお手元に郵送してまいりましたが、平成24年度より紙媒体によるお届けを廃止し、現在、ホームページで公開しております電子媒体の会報に一本化する方向で検討を進めております。従来の紙媒体では単色刷りとなっておりましたが、電子媒体ではフル・カラーでご覧いただけます。

## \*会員消息

省略

英米文化学会会報 第88号 編集/発行：英米文化学会 編集責任者：佐野潤一郎  
〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 5-27-23

英米文化学会事務局 〒339-8539 さいたま市岩槻区馬込 1288 人間総合科学大学人間科学部 大東俊一研究室内  
Tel:048-749-6111(office), 03-5399-3395(home) E-mail:ShunichiDaito(at)SES-online.jp  
年会費等振込先：郵便振替 加入者名 英米文化学会 口座番号 00160-7-611777  
学会ホームページ <http://www.SES-online.jp/indexj.html>